

## Document Citation

Title	<b>War and peace</b>
Author(s)	
Source	<i>Publisher name not available</i>
Date	
Type	distributor materials
Language	English
Pagination	
No. of Pages	8
Subjects	
Film Subjects	War and peace, Vidor, King, 1956



LEO TOLSTOY'S

War

and

Peace





俳優についても、三人の主役のほかに重要な役が二十いくつもあり、それぞれとくしゅのタイプを必要としたので、アメリカ、イギリス、イタリア、オーストリア、スウェーデンの各国からえらんで国際的キャストが組まれた。戦場の場面にはイタリア軍隊から一八、〇〇〇人の兵士と六、〇〇〇頭の軍馬が借りられ、ある場面では五マイルにわたって戦場が行われているのが見られる。

以上は製作にかかるまでの準備の一端をしるしたもので、このほかにも一八〇〇年代のはじめのロシアの風習についての専門家や歴史学者、ナポレオン研究家、トルストイ研究家をあつめての考証の仕事などもあり、たとえていえば十本の大作に同時にとりかかったようなものであつた。

しかし、このような辛苦と努力があつてこそ、映画事業六十年の夢が実現したのであつた。デ・ロレンティスとパラマウントの名を映画史に永遠にのこすべき七、〇〇〇、〇〇〇ドル（二十五億二千万円）の巨篇「戦争と平和」はこうして生まれたのである。

## ★ 解 説 ★

映画がはじまつてから六十年、すべてのプロデューサーがかならず一度は製作したいと夢に抱いていたトルストイの「戦争と平和」がついにパラマウントの手によって映画化された。トルストイの「戦争と平和」はいまでもなく、世界文学史上、最高最大の名作であり、心あるプロデューサーの食指をそそのめるのは当然であるが、あまりにも規模が大きく、あまりにも構想が雄大なもので、だれも手をつけるものがなかつた。それをパラマウントがついに敢行した。不可能を可能ならしめた偉業と云われなければならぬ。

もちろん、このような大作の製作には慎重な準備がいる。企画を検討すること数年、原作を尊重する上からもヨーロッパで製作することがまず考えられ、さいわい、イタリアのポンテイルロレンティス・プロが協力を申し出たので、協同製作の案がまとまり、「ユリシーズ」「苦い米」「南の肌」のプロデューサー、デイノ・デ・ロレンティスが製作を担当することになった。監督には「テキサス決死隊」「摩天楼」の名匠キング・ヴィダーが採用され、「OKネロ」「河の女」をつくったイタリアの才幹マリオ・ソルターティが第二班の監督になった。シナリオには米・仏・伊の著名のシナリオ・ライターと作家九人を動員、撮影監督は「赤い靴」「アフリカの女王」「裸足の伯爵夫人」のイギリスの名手ジャック・カーディフと「ユリシーズ」「ヨーロッパ一九五一年」「ポー河の水車小屋」のイタリアの老練アルド・トンティ、音楽は「平和に生きる」「道」のニノ・ロータ、美術監督に「ナポリの饗宴」のマリオ・キアリ、衣裳に「ナポリの饗宴」のマリア・デ・マティス、メイクアップに「蝶々夫人」のアルベルト・デ・ロッシと製作スタッフのすべてに英・米・仏・伊の有能な人材をあつめている。

主役には「ローマの休日」「麗しのサブリナ」のオードリー・ヘッパバーンが待望二年ぶりの出演、「ミスター・ロバート」「荒野の決闘」のヘンリー・フォンダと「リリー」の美しいロザリンドのメル・ファラーの二人の名優を相手にすばらしい三重奏の名演技を見せている。助演俳優陣も多彩をきわめていて、「アンナ」「にがい米」「ラブソディ」のヴィトリオ・ガスマン、「第七のヴェール」「黒ばら」「絶壁の彼方へ」のハーバート・ロム、「ママの思い出」「白銀の嶺」のオスカー・ホルムカ、「画家とモデル」「中共脱出」のアンタ・エクバーク、「ガラスの靴」「楽園に帰る」のバリー・ジョーンス、「怪僧ラスプーチン」「エディ・フォイ物語」のミリー・ウィターレ、「情事の終り」「ホプソンの婿えらび」のジョン・ミルス、「ミニヴァー夫人」のヘルムート・ダンティーン、「ローマの休日」のツリオ・カルミナティ、「貴方は若すぎる」のアンナ・マリア・フェレロと英・米・伊をはじめ、スウェーデン、オーストリアからも適材適所の俳優をあつめている。テクニカラー、ビスタビジョン作品であることはいうまでもないが、上映時間も三時間半に及び「風と共に去りぬ」をはるかにしのぐ映画史上空前の豪華超大作である。





## 映画史上最高の巨篇

### 「戦争と平和」が生まれるまで

映画がはじめてこの世に生まれてから、トルストイの「戦争と平和」を映画化することはすべての映画製作者の夢であった。一九二五年以降だけでも、アメリカ、フランス、イタリアの一二五人のプロデューサーが「戦争と平和」の映画化を発表して、企画からシナリオにまで手をつけたものもあるが、あまりにも膨大な規模と複雑な内容のために陽の目を見ずに挫折し、少く見ても一〇、〇〇〇、〇〇〇ドル（三十一億六千万円）の準備費が無駄になっていた。

イタリアのプロデューサー、デイノ・デ・ロレンティス（「にがい米」）「ヨーロッパ一九五一年」「ユリシイズ」が「戦争と平和」の映画化を思い立つたのは一九四九年のことだ。五年のあいだ着想をねっていたが、五四年の春、パラマウントの協力を得ることに成功、映画事業五十年の夢がついに実現することになった。

デ・ロレンティスははじめ、監督にイリア・カザン、主演俳優にジェラルド・フィリップ、マロン・ブランド（ナターシャ役はきめていなかった）その他を予定していたが、パラマウントとの提携が成立するとともに、監督キング・ヴィグダー、主演オードリー・ヘッpbアン、ヘンリー・フォンダ、メル・ファーラーという顔ぶれが決定、製作開始は五五年八月と定められた。

ところが、デ・ロレンティスの壮挙が外部にもれると、五五年一月、デ・ヴィッド・セルズニック（「風と共に去りぬ」のプロデューサー）とトッド・A・システムのマイケル・トッドが同時に「戦争と平和」映画化の企画を発表した。とくに、トッドはロバート・シャールウッドがすでに脚本を執筆中であり、監督もフレッド・ジンネマンに決定したと発表したため、デ・ロレンティスも準備を急ぎ、予定をくりあげて五五年七月四日から撮影を開始することになった。

その後、セルズニックは企画をとり下げたが、トッドはいまだに締めず、ソ連政府がロシアで撮影することを許可すれば製作したいと云っている。映画製作者にとつて、「戦争と平和」の映画化はそれほど魅力のある仕事なのである。それだけに、この難事業を完成したデ・ロレンティスとパラマウントの功績も大きなものと云わなければならない。

デ・ロレンティスにとつて、最初の難関は一、六〇〇ページの大冊をいかに脚色するかということであつた。デ・ロレンティスはこの仕事にフランスからジャン・オーランシュ（「禁じられた遊び」）ピエール・ボスト（「禁じられた遊び」）イタリアからマリオ・カメリニ（「ユリシイズ」）エニオ・デ・コンチニ（「水田地帯」）マンボ・イヴォ・ペリリ（「にがい米」）「明日なき愛情」アメリカからブリジット・ボーランド、ロバート・ウェスタビーの七人のシナリオ・ライターと作家を動員、まず四〇〇ページのストーリーに書きなをさせ、それをアメリカの作家アーウィン・ショウ（「愛の嵐」）がさらに三〇〇ページに短縮、これをもとにしてシナリオをつくった。

次の難関はロケイション地の選択であつた。「戦争と平和」の舞台は一八〇〇年代のはじめのロシアであるし、アウスレルリツ、ポロディノ、ベレジナの史上に名高い戦場場面やナポレオンのモスコイからの退却の場面を撮らなければならないからだつた。

ロケハンにはフィンランド、ユーゴスラヴィア、スペイン、北部イタリアで行われ、はじめフィンランドが候補地にあげられたが、エキストラの経験者を多ぜい必要とするところから北部イタリアで撮影することにきまつた。

屋内場面はボンティ・ロレンティス撮影所の四つのスタジオではとてい足りないで、チネチッタ撮影所の三つのスタジオとセントロ・スベリメンタレ撮影所の三つのスタジオを借りて撮影された。

モスコイの市街はローマの郊外に一八二二年のモスコイそのままにつくられた。この市街はナポレオンのモスコイ入城の場面を撮るときに焼きはられた。

これらのセットの費用だけで一、〇〇〇、〇〇〇ドル（三億六千万円）をこえた。

小道具の数と費用も莫大だつた。こまかい点まで正確を期したので、美術監督の仕事も大へんだつた。ロシア軍とフランス軍の兵士のために当時のものと同一軍服が七千着つくられ、ボタンだけでも十萬個を要し、スイスのあるボタン会社が昼夜兼行で仕事をして二週間かかった。一人の兵士のために要した費用が装備もふくめて二五五ドル、一般市民の服装が六五ドル、三十五台の馬車をつくるのに総計一〇、〇〇〇ドルかかった。さまざまな型の二〇〇門の大砲と四、五〇〇挺の銃が専門家の指導のもとに当時のものとおなじにつくられた。これらの小道具を収容するために大きな倉庫が二棟借りられ、とくべつの裁縫工場と工作工場がつくられた。







駆落の計画はソニヤに感づかれ、ソニヤはビエールに事情を知らせた。ビエールはロストフ家にかけつけて、アナトールを追い出した。しかし、ナターシャはアナトールを諦めることができなかった。モスコイにもどつたアン・ドレイはナターシャの心変わりを知って一そう憂鬱な人間になった。

休戦の期間があつて、戦雲がふたたびたふはめじた。ナポレオンはニーマン河に大軍をあつめ、一挙にロシア軍を粉砕しようとしていた。クツゾフ將軍は建物や作物を焼きはらつて退却、焦土戦術をもつて敵に当らうとした。しかし、ボロディノの近くで、とうとう決戦がきけられないことになつた。

ボロディノはビエールの田舎の邸の近くで、ビエールはナターシャを失つてからここにひきこもつていて、ロシア軍が総くずれになつて退却するのを眼の前に見た。兵卒がばたばた命を失うのを見ると、ナポレオンを崇拝していた自分を恥じ、みずから戦場に立つて、戦傷をうけた。アナトールはこの戦いで戦死した。アンドレイも重傷を負つた。

クツゾフ將軍はモスコイを焦土と化してナポレオンに引き渡す作戦をたてた。市民の撤退ははじまり、ロストフ家のものも家財を車につんで、モスコイを去つた。ビエールはしかし、ひそかにモスコイにのこつて、世界を破壊にみちびく狂人を射とめようとはかつた。ナポレオンはモスコイに入城して寒さを防ぐ家もなく、食糧もないことを知つた。機会をうかがつていたビエールはやつとナポレオンに近づいて、射殺しようとしたが、相手がナポレオンであらうと誰であらうと、殺人を行う気になれなかつた。自暴自棄になつて街をさまよい、フランス軍に捕えられて、牢獄にいれた。

ロストフ家の人々はモスコイの東方の僧院に難をきたした。重傷のアンドレイも一しよだつた。アンドレイはやつと人間の弱さをとり、すべての憎しみの心を捨て去り、ナターシャに抱かれて、安らかに死んでいった。ニコラスはアンドレイの子供をひきとつていたマリヤと僧院にやつてきた。ソニヤは恋をあきらめて、ニコラスをマリヤにゆづつた。

ビエールは牢獄でおなじように捕われていた農民のプラトン（ジョン・ミルス）と知りあつた。プラトンは信仰があつく、いずれは死刑となる身でありながら、すこしも苦しんでいない様子があつた。

ナポレオンはついにモスコイを撤退、ニーマン河まで引きかえす決心をした。十月のある日、フランス軍はあわれな姿で西にもどりはじめた。捕虜も一しよにつれて行かれて、疲労して歩けなくなつたものは容赦なく射殺された。プラトンもその一人だつた。

ドロコフの率いたコサック騎兵がフランス軍をおそつて、何名かの捕虜をとりもどした。ビエールも運よく、そのときに救われた。

十一月の末、クツゾフ將軍は大軍をもつてフランス軍をおそい、土気のおとろえた敵軍をベレジナ河へ追いこんだ。ナポレオンは部下を見すて、パリへ逃げかへつた。

ビエールがモスコイにもどると、焦土と化した街に復興の希望がもえはじめていた。いまは荒廃して見るかげもないロストフ邸で、おとなになつたナターシャが彼を待っていた。ビエールがナターシャにもたらししたのは、経験とプラトンが彼に教えた人生の真実だつた。

## 「戦争と平和」の登場人物

### ニコラス家



ニコラス・ロストフ伯爵  
(バリー・ジョーンズ)



ロストフ伯爵夫人  
(リア・シードル)

### クラークン家



バジル・クラークン公爵  
(ツリオ・カルミナティ)



ソニヤ・ロストフ  
(メイ・ブリット)



ベティア・ロストフ  
(シーン・パレット)



ナターシャ・ロストフ  
(オードリー・ヘッパバーン)



ニコラス・ロストフ  
(ジェレミー・ブレット)



ヘレーネ  
(アンタ・エクバーク)



アナトール・クラークン  
(ヴィットリオ・ガスマン)

### ボルコンスキー家



ボルコンスキー公爵  
(ウィルフレッド・ローズン)



マリヤ・ボルコンスキー  
(アンナ・マリヤ・フエレロ)



アンドレイ・ボルコンスキー  
(メル・ファラー)



リーゼ・ボルコンスキー  
(ミリー・ウィタール)

### その他の人々



ビエール・ベズコフ  
(ヘンリー・フォンダ)



ナポレオン・ボナパルト  
(ハーバート・コム)



クツゾフ將軍  
(オスカー・ホルムカ)



ドロコフ  
(ヘルムート・ダンティーン)



プラトン・カラッエフ  
(ジョン・ミルス)





アンドレイはじめて子供を生むので気がいらだつて妻のリーゼを田舎の邸へ旅立たせて戦線に向った。田舎の邸には、厳格な父親(ウィルフレッド・ロース)とやさしい妹のマリア(アナ・マリヤ・フェレロ)がいた。リーゼにとつてきびしい義父とくらすことは気がつかないで、マリアは内気な娘で、リーゼに同情しながら父への遠慮から慰めのことをかけることができなかった。

そのころ、ロシア軍は戦線に到着、モスコウでは、遠くの戦いの噂がしきりに交わっていた。ナターシャにとっては、戦争はまったく別世界のものだ。ただ、ロシアの将兵の勇ましい奮戦ぶりばかりを夢みていた。幼い弟のベテニア(シーン・パレット)は戦いに連れられ、口惜しがっていた。ピエールはとうとうヘレーネと結婚することになり、その準備に忙殺されていた。ロシア軍とフランス軍はチェコスロヴァキアの小さな村アウステルリッツで相対していた。ニコラスは戦線がはじまるのを待ちどおししていた。アンドレイはロシア軍の総司令官クツァフ将軍(オスカー・ホルムカ)の幕僚の一人だった。将軍は戦争の結果を楽観していなかった。勝敗は作戦の可否ではなく、兵士の士気にあるのだが、兵士たちは身分がいやしく、貴族出身の上官の命のままに戦うことをころよく思っていないというのだった。

いよいよ、戦線がはじまり、ニコラスは勇んで出陣したが、馬を射たれてふりおとされ、急に怯けついで、命からがら逃げかえった。アンドレイもはじめて戦争の悲惨な現実を見て、いままでの考え方がまちがっていたことを悟った。しかし、自分の中隊が敗退して、兵士たちが先きを争って逃げはじめると、軍旗を振って敵中におどりこみ、傷つて倒れた。フランス軍は彼が死んだものと思つて、眼もくれなかった。アンドレイは苦痛のためにかすんだ眼でナポレオン(ハーバート・ロム)が馬を走らせて行くのを見た。もはや英雄ではなく、人間の生命をおもちゃのように考えている狂人のナポレオンだった。

アウステルリッツの敗戦の後、休戦条約が結ばれた。将兵がモスコウにもどってきた。ニコラスも家がもどってきたが、ソニヤは恋人が生まれ変わったような感じが人間になったことを知った。アンドレイが父のものにもどったとき、リーゼがお産で死んだ。アンドレイはリーゼを苦しめたことを後悔し、そのうしろに戦場でおぼえた幻滅がいつまでも忘れられず、むかしの陽気な性格が一変して、気むずかしい人間になった。

ピエールもまた、ヘレーネとの結婚が失敗だったことを知った。田舎の領地で農民たちと一しょにくらすことにはじめて生きがいを感じたのだったが、ハチ好きなヘレーネは田舎の生活が退屈でたまらず、ピエールを田舎にのこして、モスコウへ帰って行った。

モスコウへもどったヘレーネは男から男へと渡り歩き、ピエールの友だちのドロコフもその男の一人になった。ピエールは決闘を申しこんで、ドロコフを傷つけ、ヘレーネと別れた。ロストフ家の陽気な空気のなかでナターシャの姿を見ることだけが唯一の慰めになった。

ピエールはロストフ家の人々を田舎の邸へつれて行った。ナターシャはそこでアンドレイに会い、アンドレイは一眼でナターシャの魅力のとりこになった。十八歳になったナターシャもアンドレイに想いをよせるようになり、二人の仲は急速にすすんでいった。ピエールもナターシャを愛していたのだが、ナターシャもアンドレイも、そのことに気がついていなかった。

やがて、ナターシャとアンドレイのあいだに結婚の話が持ち上ったが、アンドレイの父はロストフ伯爵の浪費癖が気に入らないで、アンドレイに結婚を延期させ、旅に立たせた。

さびしくモスコウに取りのこされたナターシャは心たのしみぬ日を送っていたが、ある夜、オペラでアナトール・クラギン(ウィットリオ・ガスマン)という青年に巧みに云いよられ、墮落の計画をたてた。アナトールはヘレーネの兄の道楽者で、うぶなナターシャをくどきおとすことなどは朝飯前なのだった。

## レオ・トルストイ LEO NIKOLAI VICH TOLSTOY (1828-1910)

文学を口にするものももちろん、文学に関心を持たないものでもトルストイの名前は知っている。ロシアの世界的文豪であるだけでなく、シェイクスピア、ゲーテとともに全世界にもっともよく知られている大作家である。「戦争と平和」はその代表作で、一八六四年から六九年にかけて完成された。この世界的名作の映画化はこれまで何回か企てられたが、雄大なスケールと多くの登場人物と複雑な内容のために実現せず、映画はじまって以来五十年、パラマウント映画によつてはじめてなされ、げられたのである。

トルストイの作品の特色を一言でいえば、農民を中心とする庶民の立場に立った世界観で、善と愛による世界の救済、特権階級への批判がするどい観察力とされるされている。ロシアが共産主義国家になってからもひろく読まれている事実は、トルストイがいかに偉大であるかを語るものであろう。

一八二八年八月二十八日、名門貴族の家に生まれ、青年時代から農民の生活改善につとめ、軍務についてクリミア戦争に従軍後、農奴解放の運動にも尽力した。六二年に結婚してからは文学に専心、晩年には自分の思想と生活に矛盾を感じ、家出したまま、一九一〇年十一月七日に死んだ。主な作品は「戦争と平和」、「アンナ・カレーニナ」、「クローイツェル・ソナタ」、「闇の力」、「復活」などである。

## キング・ヴィダー KING VIDOR

「戦争と平和」はキング・ヴィダーの四十年近くのながい監督生活のあいだの三本目の超大作である。第一回は第一次大戦映画のナンバー・ワン「ビッグ・バレット」(一九一五年)第二回はセルズニクスの巨篇「白昼の決闘」(四七年)で、どちらもアメリカ映画史に永遠に記録される作品であるが、「戦争と平和」はそのスケールにおいても、作品の重要性からいっても、前二作をはるかにしのぐもので、この映画の演出の重責をまかされたことは、ヴィダーがいかにハリウッドで高く買われているかを示すものである。セルズニクミルの監督は、ヴィダーはど多くの大作を手がけてきたるヒューマニズムとさわやかな人情にあるとされている。大作をまとめあげる手腕は忘れられがちであったが、世紀の巨篇「戦争と平和」によつて、巨匠キング・ヴィダーの名が改めて大きくクローズアップされたものと云える。

一八九四年二月八日、テキサス州ガルヴェストンの生まれ。少年時代から映画界に入り、小道具係、シナリオライター、カメラマン、助監督をへて、一九一九年、監督となる。監督作品はすくなく、重要なものだけをあげても、「涙の船頭」(ビッグ・バレット)「ボエム」(ハレルヤ)「ピリー・ザ・キッド」(街の風景)「チャンプ」(シナラ)「南風」(麦秋)「薔薇はなぜ赤い」(テキサス決死隊)「ステラ・ダラス」(城砦)「北西への道」(白昼の決闘)「摩天楼」(東は東)「星のない男」などがある。

## ディノ・ロレンティス DINO DE LAURENTIIS (プロデューサー)

イタリア映画でもっとも精力的な活動を見せつけているプロデューサーの一人。一九一九年八月八日、ナポリの近くに生まれ、まだティーンエイジャーの頃から映画事業に興味を持ち、最初はエキストラとして映画界に入ったが、後に製作に転向、シナリオ、カメラその他の技術を学んでプロデューサーになった。五〇年、カルロ・ポンティと手を組んで、「にがい米」(シラ山の狼)「ヨーロッパ一九五一年」(人間魚雷)「紅バラは山に散る」(マンボ)「ユリシーズ」(侵略者)などを共同製作、イタリア映画の名を全世界にたかめた。五五年、ポンティに株を売って、独立プロデューサーになった。夫人はシルヴァーナ・マンガノである。

## ジャック・カーディフ JACK CARDIFF (撮影監督)

「黒水仙」(アカデミー色彩撮影賞)「赤い靴」(アフリカの女王)をはじめ、色彩映画の魔術師の名にそむかぬ多くの名作を手がけて世界最高の撮影監督と云われている名手である。一九一四年、イギリスに生まれ、子役として映画界に入り、二八年からカメラマンとして立つ。戦前からクレレル、フエーデ、ヒッチコック、コルダその他の名監督のカメラマンをつとめ、色彩映画時代になってからはますます本領を発揮した。主要作品には上記のほか、「幽霊西へ行く」(鎧なき騎士)「シーザーとクレオパトラ」(黒ばら)「パンドラ」(裸足の伯爵夫人)「黒い牡牛」などがある。

## アルド・トンティ ALDO TONTI (撮影監督)

戦前からイタリア映画のカメラマンとして活躍しているヴェテランの一人。一九一〇年三月二日、ローマの生まれ。高等工業学校に学んで、報道カメラマンをしていたが、三四年、映画界に入つて「シビオン」のカメラマン助手をつとめ、すでに四分の一世紀をカメラマンとして過ごしている。わがくに紹介されている作品には、「ボレ」(河の水車小屋)「シラ山の狼」(ヨーロッパ一九五一年)「人間魚雷」(侵略者)などがある。

## マリオ・ソルダティ MARIO SOLDATI (第二班監督)

映画監督としても作家としても知られ、ニュー・ヨークのコロムビア大学で文学と美術史の講座を持っていたこともあるという変り種。一九〇六年十一月十七日、トリノの生まれ。はじめ作家として活躍、三一年から、マリオ・カメリーニ監督(ユリシーズ)の助監督をつとめながら、シナリオを書きはじめ、三七年に第一回監督作品を世に送った。四一年の「小さな古風な世界」(アリダ・ヴァリ主演)は当時の傑作の一つと云われているが、わがくにはまだ「OKネロ」(河の女)が紹介されているにすぎない。作家としても毎年長篇を発表、文学賞をもらっている作品もすくなくない。

## ニノ・ロータ NINO ROTA (音楽)

イタリアの代表的作曲家の一人であり、「平和に生きる」(道)「ロミオの女」などの音楽でも知られているニノ・ロータは十二歳のときから作曲を学び、十四歳のときにアンデルセンの童話から三幕のオペラを作曲したという天才である。一九一一年十二月三日、ミラノの生まれ。アメリカにわたって、フィラデルフィアで作曲を学んでいたこともあり、シンフォニー、ソナタ、オペラなどのほか、オペレッタ、レヴェューなども手がけて、ゆたかな才能を示している。作曲を担当した映画では、以上のほか、「地中海の虎」「人間魚雷」(大いなる希望)などが紹介されている。







# 戦争と平和

WAR  
AND  
PEACE

パラマウント超巨篇 ビスタビジョン総天然色



8p #23659

# LEO TOLSTOY'S War and Peace



## THE CAST

Natasha .....	AUDREY HEPBURN
Pierre .....	HENRY FONDA
Andrey .....	MEL FERRER
Anatole (brother of Helene) .....	VITTORIO GASSMAN
Helene .....	ANITA EKBERG
General Kutuzov .....	OSCAR HOMOLKA
Napoleon .....	HERBERT LOM
Platon .....	JOHN MILLS
Dolokhov .....	HELMUT DANTINE
Lise (wife of Andrey) .....	MILLY VITALE
Count Restov (Natasha's father) .....	BARRY JONES
Prince Bolkonsky (Andrey's father) .....	WILFRED LAWSON
Countess Rostov (Natasha's mother) .....	LEA SEIDL
Nicholas Rostov (Natasha's brother) .....	JEREMY BRETT
Petya Rostov (Natasha's brother) .....	SEAN BARRETT
Mary Bolkonsky (Andrey's sister) .....	ANNA MARIA FERRERO
Sonya .....	MAY BRITT
Kuragine (father of Helene) .....	TULLIO CARMINATI
Denisov .....	PATRICK CREAM
Peronskava .....	GERTRUDE FLYNN

## CREDITS

Produced by .....	Dino De Laurentiis
Directed by .....	King Vidor
Based on the novel "War and Peace" by Leo Tolstoy	
Adaptation .....	Bridget Boland, Robert Westerby, King Vidor, Mario Camerini, Ennio De Concini, Ivo Perilli
Director of Photography .....	Jack Cardiff
Director of Photography, Second Unit .....	Aldo Tonti (A.I.C.)
Color by .....	Technicolor
Art Director .....	Mario Chiari
Associate Art Director .....	Franz Bachelin
Assistant Art Director .....	Gianni Polidori
Costumes .....	Maria De Matteis
Set Decoration .....	Piero Gherardi
General Production Manager .....	Bruno Todini
Production Assistant New York .....	Ralph Serpe
Supervising Editor .....	Stuart Gilmore
Editor .....	Leo Catozzo
Sound Editor .....	Leslie Hodgson
Sound Recording .....	Charles Knott
Dialogue Coach .....	Guy Thomajan
Production Assistant to Mr. Vidor .....	Arthur Fellows
Assistant Directors .....	Piero Musetta, Guidarino Guidi
Makeup Supervision .....	Alberto De Rossi
Antiques for set decoration supplied by .....	Vangelisti—Lucca, Tuena—Rome
Music Score by .....	Nino Rota, Directed by Franco Ferrara
	Western Electric Recording

## THE STORY

HAVING brought most of the rest of Europe to its knees, the invincible Napoleon Bonaparte has at last turned his attention to Russia. In Moscow, a young liberal named Pierre Bezukhov (Henry Fonda) pays a visit to the household of his good friend Count Rostov (Barry Jones) and the Countess (Lea Seidl). The Rostovs are readying their elder son Nicholas (Jeremy Brett) to depart with the troops.

But the member of the family dearest to Pierre's heart is its vivacious thirteen-year-old daughter Natasha (Audrey Hepburn). After watching the departure of the troops with her, he goes to

a drunken farewell carouse being given by the dissolute army officer Dolokhov (Helmut Dantine). Illegitimate son of the Czar's trusted adviser, Count Bezukhov, Pierre has made undesirable acquaintances because of the equivocal position he occupies unless his father will acknowledge him. His drunken spree is broken in on when his closest, truest friend, moody young Prince Andrey Bolkonsky (Mel Ferrer), arrives to tell Pierre that the old Count is dying and has asked to see him.

On his deathbed, the elder Bezukhov at last acknowledges Pierre as his heir. The estate the young man has inherited is great enough to spark the interest of old Prince Vassily Kuragine (Tullio Carminati) and his beautiful daughter Helene (Anita Ekberg), and Helene sets out to lure the dazzled Pierre into marriage. Meanwhile, Andrey—bored with society and his shy little wife Lise, (Milly Vitale)—is preparing to go to the front on the staff of General Kutuzov (Oscar Homolka), friend of his father, stern old Prince Bolkonsky (Wilfred Lawson).

Andrey goes off to join Kutuzov and on the disastrous battle field of Austerlitz, he briefly rallies a routed Russian company, falling with the flag in his grasp, being left for dead. His wounds, however, are not fatal and he returns to the Bolkonsky estate to find his terrified Lise dying in childbirth. Self-reproach and his new disillusionment with military glory combine to make a recluse of him.

During these same months, Pierre's marriage to Helene has not proven a happy one. The bride has made herself so publicly conspicuous with the immoral Dolokhov that Pierre is compelled to challenge his former friend to a duel; and, although he is no match for the older man, he wounds Helene's lover with a lucky shot. Naturally, he considers his marriage over.

Summer comes to Russia once more, and Pierre introduces his brooding friend Andrey to Natasha. Despite her youth, Andrey falls completely in love with her and tells her so at a court ball. But old Prince Bolkonsky insists his son must go away for a year before he will consent to their marriage. Romantic and inexperienced, Natasha soon falls prey to the passionate suit of unprincipled Anatole Kuragine (Vittorio Gassman). Too late, Natasha discovers that Anatole has a wife and that she had betrayed Andrey's faith in her for nothing.

Pierre, belatedly aware that his fondness for Natasha has ripened into love, goes back to his country estate. It is now the scene of war, where Napoleon is engaging the Russian forces—Andrey among them—in the Battle of Borodino. An eyewitness to the horror and ruthlessness of war, Pierre no longer entertains the admiration for Bonaparte (Herbert Lom) that sustained his younger theorizing. The wily General Kutuzov withdraws to allow Napoleon to over-extend himself by marching on to Moscow. The Russian plan is to burn everything in the enemy's path and leave them at last far from home in an empty city without supplies or resources.

Among the terrified thousands who flee the undefended city, as the French draw near, is the Rostov family. But Pierre has remained behind in the doomed city, intending to assassinate the glory-mad Napoleon for humanity's sake.

At the last moment, however, he finds himself unable to kill any man in cold blood. He is captured by the French and flung into prison, where he encounters a peasant philosopher named Platon (John Mills) whose commonsense view of life does much to mature Pierre's own thinking.

Ignorant of Pierre's fate, the Rostovs have taken refuge in a monastery far east of Moscow. Here, Andrey is brought dying of new battle wounds. He and Natasha are reconciled before his death, and he leaves his small son in her care.

As winter closes in and supplies are unobtainable, Napoleon realizes he must fall back from Moscow or starve. Among the prisoners forced to accompany his retreating army are Pierre and Platon. Platon dies, along with many others, during their grim march. But Pierre lives to be freed by a riding troop of Cossacks, although he sees Natasha's younger brother Petya (Sean Barrett) fall in the encounter. He learns from Dolokhov, his former enemy and now his rescuer, that his wife, Helene, has died.

The French meet final defeat at the Battle of Berezina. With the return of peace, soldiers and civilians alike make their ways back to their former homes. Among them is Pierre, who finds a maturer and wiser Natasha. They know now that the future will be shared by them together.